

| | |
|--------------|---|
| Title | 批判的社会言語学の深化 はしがき |
| Author(s) | |
| Citation | 言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 1-2 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/88396 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

はしがき

本プロジェクトは『批判的社会言語学の諸相』（2002 年度）、『批判的社会言語学の可能性』（2003 年度）、『批判的社会言語学の射程』（2004 年度）、『批判的社会言語学の展開』（2006 年度）、『批判的社会言語学の課題』（2007 年度）、『批判的社会言語学の実践』（2008 年度）、『批判的社会言語学の展開』（2009 年度）、『批判的社会言語学の領域』（2010 年度）、『批判的社会言語学の方法』（2011 年度）、『批判的社会言語学の構築』（2012 年度）、『批判的社会言語学の展望』（2013 年度）、『批判的社会言語学の軌跡』（2014 年度）、『批判的社会言語学の潮流』（2015 年度）、『批判的社会言語学のまなざし』（2016 年度）、『批判的社会言語学のメッセージ』（2017 年度）、『批判的社会言語学の思潮』（2018 年度）、『批判的社会言語学の探訪』（2019 年度）、『批判的社会言語学の対話』（2020 年度）の延長線上にある。また、『「正しさ」への問いー批判的社会言語学の試み』（野呂香代子・山下仁、三元社、2001、新装版 2009 年）、『「共生」の内実ー批判的社会言語学からの問いかけ』（植田晃次・山下仁、三元社、2006、新装版 2011 年）、『ことばの「やさしさ」とは何かー批判的社会言語学からのアプローチ』（義永美央子・山下仁、三元社、2015 年）とも深い関連を持つ。さらに、2012 年度から全学的に開始され、山下が運営統括委員、植田がプログラム担当者に名を連ねていた「未来共生リーディングプログラム」とも関連を持つものである。

2002 年に開始された本プロジェクトの出帆より 20 年の歳月が流れた。この間、幾多の論文・翻訳によって、上掲のように「批判的社会言語学」の「諸相」・「可能性」・「射程」・「展開」・「課題」・「実践」・「領域」・「方法」・「構築」・「展望」・「軌跡」・「潮流」・「まなざし」・「メッセージ」・「思潮」・「探訪」・「対話」に取り組み、今年度は「深化」をテーマとした。

2022 年 2 月 24 日に開始されたロシアのウクライナへの軍事侵攻は明らかな国際法違反であるが、非人道的で残虐な行為が行われていることが日々報道されている。またロシア国内においては政府への抗議行動は封じられているという。残酷な人道危機はウクライナに限ったことではなく、ミャンマー、イエメン、シリア、アフガニスタン、中央アフリカ等地球の様々な場所に存在することも忘れてはならない。このような状況にあって我々にできることは、微力ながらも基本的人権である言論の自由をひたすらに行使し、我々が昨年度掲げた「対話」を「深化」させていくことしかないのかもしれない。本プロジェクトは、このような現代社会を「言語」と「社会」の関係を扱う社会言語学の立場で、研究者それぞれのテーマを「深化」させようと試み、最善の解決策をさぐるべく批判的に論じようとするものである。

山下論文は、協調的ではないコミュニケーションについて論じたものである。まず、新型コロナウイルスと協調的ではないコミュニケーションの存在の関係を記すため、カミュの「ペスト」とそれに対する高橋源一郎の解釈を紹介する。次に、新型コロナウイルスの影響についてクルマスが行ったアンケートの結果を紹介する。さらに、日本の菅義偉首相の評価と、ドイツの

ンゲラ・メルケル元首相が2020年の3月18日に行った演説から、日独両国で協調的ではないコミュニケーションが存在することが確認される。最後に、この協調的ではないコミュニケーションがポライトネス理論やグライスの協力の原則を用いて分析することが可能かどうかという問題が取り上げられる。

上田論文は、日本ではあまり知られていない言語学概念 *intercomprehension* の多義性、ならびに多義的だからこそ存在する定義的な問題点を日本語で紹介している。それと同時に、そうした多義性・定義的問題点を考慮しつつ、*intercomprehension* という概念に充てられてきた複数の日本語訳の妥当性を検討している。

呉論文は、台湾在住外国人向けの多言語表示を取り上げた。まず、言語景観の定義と先行研究を紹介した。その上で、台中市において外国人住民が集まる場所である「東協廣場」に焦点をあて、そちらに設置されている公共的な表示を調査し、外国人住民に対する言語景観にはどのような言語で表示され、どのような特徴があるかについて分析した結果をまとめた。

沈論文は、日本政府が受け入れている外国人の一カテゴリーである高度人材を取り上げ、新聞記事において高度人材の対象がどのように表象されているかを分析し、さらにメディアの表象の背後にある理由やその危険性について考察したものである。

植田の研究ノートは、朝鮮語の呼称をめぐる先行研究の示す問題点を手掛かりに、2020年から2022年に刊行された60冊の朝鮮語テキストの書名・副題・「はじめに類」に見られる呼称を検討したものである。ここでは、高等教育を念頭に、「外国語をなぜ教える／学ぶのか」という問題意識の下に、歴史と変化のはざまという視点から、テキストに現れた言語観・言語文化圏観をめぐる簡単な検討を試みた。

小川の研究ノートは、2017年に発表された「ルクセンブルク語振興戦略」の契機となった住民による議会への2つの請願を取り上げ、内容を検討している。またそこから見えるルクセンブルクで今日の課題となっている移民社会における言語問題とその背景にあるイデオロギーについても検討を試みた。

読者の皆様からの忌憚なきご意見、ご批判などをお伝えいただけたら幸いです。

執筆者一同